【連載】

台　湾　文　壇

―はじめに―

某出版社より依頼された当代文学紹介の仕事のうち台湾文学、台湾作家の紹介が、同社の都合で予定変更となり、手許に貴重な原稿が残った。執筆者の了解を得て、小誌にできうるかぎり関連参考資料とあわせて紹介、連載していくこととする。　（編集部）

〔１〕概況

台湾文学は特殊な歴史的環境の中で芽ばえ、迂余曲折の、いばらの道を経て成長した、中国文学の一部である。最初は、大陸の五四運動に呼応した形で、1920年に『台湾青年』を創刊、翌年には台湾文化協会が設立され、新文学運動と民族解放運動が同時にスタートした。24年、張我軍は「糟糕的台湾文学」「為台湾文学一哭」等を『台湾民報』に発表、新旧文学論争の火ぶたがきられた。ついで、胡適、魯迅らの作品が紹介され、頼和、楊雲萍らの新詩も発表された。

20年代後半、労農運動とプロレタリア文学運動の機運が高まり、30年代には『伍人報』『台湾戦線』『明日』（いずれも白話文）や『洪水報』が刊行され、31年には台湾文芸作家協会が設立された。黄石輝の「怎樣不提倡鄉土文学」という一文は、文芸大衆化運動における“台湾語か白話か”という問題の一石を投じたが、当局の弾圧もあって結果を見るには至らなかった。しかし、頼和らが『南音』を創刊して、台湾語文による創作、民間文学研究の契機をつくりだした。

33年、東京で台湾芸術研究会成立、『フォルモサ』創刊、台北では台湾文芸協会成立、『先発部隊』創刊。翌34年、張深切らの提唱で、第一回全島文芸大会開催、台湾文芸連盟を結成、機関紙『台湾文芸』が創刊された

が、路線などをめぐって意見がわかれ、頼和、楊逵は『台湾新文学』を創刊して左傾化した。歴史的にみれば、上記二誌が多くの台湾作家を送りだす上ではたした功績は大きい。楊逵の『新聞配達夫』、呂赫若の『牛車』は『文芸評論』に、張文環『父の顔』は『中央公論』に入選、龍瑛宗『パパイヤのある街』は『改造』に発表され、また大陸出版の朝鮮・台湾短篇小説選『山霊』が刊行されるなど、台湾文学の存在が認められるようになった。

37年１月、台湾総督府は、中国語を禁止、41年には“皇民文学”を強制、台湾文芸界は冬の時代に入った。この状況は45年８月の日本の敗戦まで続くが、この間呉濁流はひそかに『アジアの孤児』を書きつづけていた。

45年８月、台湾は中国に“復帰”、台湾文学は再出発の時期を迎えた。47年の二・二八事件は、台湾社会を震撼させ、文化人は沈黙をしいられた。48年、新聞の日本語版禁止、日本語で創作をした作家は表現の手段を奪われ多くの作家が筆を折った。その中で、戦争の傷痕をなめながら文化建設に努力したのが『台湾文化』『文化交流』であり、渡台した大陸の文化人士、許寿裳、李霽野、李何林、袁柯、黎烈文たちだった。

50年代は、台湾政府の“国是”「反共抗俄」の下で反共文学一色に塗りつぶされた。同時に、国防部提唱になる「軍中文芸」運動の中から軍中作家が輩出した。こうした傾向に反発して、台大外国文学科教授夏済安は56年に『文学雑誌』を創刊、現実逃避することなく、真実を語り、時代精神を反映するテーゼを打出した。58年、当時大学生だった尉天驄が『筆匯』を編集するに至って、純文学への道が開かれ、“学院派”文壇の主導権を確立、聶華苓、劉非烈、子于らは大陸から渡台してきた各階層の人間の実相と心理を描き、台湾省籍の呉濁流、鍾理和、鍾肇政、林海音、葉石涌らは台湾文学の伝統を継承する地道な活動を展開した。

60年代に入って、台大外国文学科の白先勇、陳若曦、李歐梵らが『現代文学』を創刊、欧米近代文学の紹介、新しい形式と風格の創作探求に活躍。O．ヘンリー、フォークナーからカフカ、実存主義、ニヒリズム、意識の流れ等モダニズムが一挙に氾濫し、ここに“新学院派”＝“大学才子派”が生まれ、高踏的、無国籍の文学が形成された。それらの代表は『台北人』を書いた白先勇であり、ほかに瓊瑤、欧陽子、水晶、七等生、施叔青、林懐民等。さらに、これらの作家がアメリカに留学、郷愁や根なし草の留学

生生活をテーマに、いわゆる「無根文学」を描いた。於翠華の『又見椋鳥、又見椋鳥』は留学生文学の代表作。

一方、64年、呉濁流は『台湾文芸』を創刊、呉濁流文学賞を設立して、鄭清文、鄭煥、林鍾隆、廖清秀、江上、黄娟、黄靈芝、季季ら新人を育成した。また、尉天驄、陳映真、黄春明、施叔青、王禎和、七等生らは、66年に『文学季刊』を創刊、現代主義批判、建設的文学を標榜した。

70年代は、60年代のモダニズムを止揚して、現実と民衆を直視する現実主義文学をめざして尉天驄ら『文学季刊』同人は、『文学双月刊』『文季』を相ついで創刊、陳映真、黄春明、王禎和、王拓、楊青矗、洪醒夫、曾心儀、宋沢莱らが郷土文学の現実主義精神を継承し、多くの問題作を発表して国の内外から注目された。もちろん、この背景には、台湾の国際的地位の変化、ナショナリズムの高揚、国内政治に対する民主的改革要求等の影響があったことは見逃せない。72～73年の現代詩論争、77～78年の郷土文学論戦、さらには79年の、王拓、楊青矗が逮捕された高雄事件（美麗島事件）などはそうした事情の一つの証左である。

84年４月、尉天驄らは『文季』双月刊を創刊、台湾文学の新しい課題として、第三世界文学との提携や自らその一翼となることをめざしているが、路はなお遠い。（葉寄民）

〔２〕唐文標（１９３６～１９８５）

評論家、詩人。1936年生まれ、広東省出身。カリフォルニア大学数学博士、教授（応用数学）、台湾政治大学数学系教授。

詩、散文、雑文、文化批評など巾広い活動をしているが評論活動が最も活発。主な著作に『唐文標碎雑』『張愛玲』『天国不是我們的』『我永遠年輕』『平原極目』がある。新詩『公無渡河』には古詩の強い影響がみられる。

70年代の現代詩論争は、彼の『僵斃的現代詩』（木乃伊化した現代詩）、『詩的没落』『先檢討我們自己吧』『什么時候什么地方什么人』と『実事求是，不作調人』がキッカケとなったものであり、のちの77年の郷土文学論戦の呼び水ともなった。

彼の詩と散文は、理智の中に強い感情を噴出させているところに特色が

ある。

1985年６月９日、鼻ガンで病歿。　　（葉寄民）

〔２・特別寄稿〕

友よ、安らかに眠れ

——唐文標を悼む——　　葉　笛

君は遂にいってしまった。永遠の帰らぬ旅に！余りにも酷く、余りにも早い。訃報を手にして、僕は茫然として、頭を一撃されたかのようだった。

畏友尉天驄の航空速達が手許に舞い込んで来たのは、一九七六年六月二十一日だった。

「老葉：一別又快一年，唐文標訂於六月廿七日（星期日）搭乗中華航空公司班機赴日，停留両天，請抽空接他一下。（飛機到達時間，請問中華航空公司，当日只有这一班，祝

好！」

便箋の上部に「唐之英文名：Monbill Tong」となぐり書きの短い手紙だった。その夜、僕は、ホテルへ君に会いに行った。

ノックと同時に：「老葉吗？」と広東訛りの強い言葉がはね返ってきた。君は僕が痛さを感ずる程、僕の手を握りしめた。

お茶を入れ、ジョニ黒のロックを二杯つくって、僕に一杯渡すと、日本、米国、中国、台湾の政治と文学を矢つぎ早に話したり、聞いたりした。数学者の君の文学と政治に対する理解、分析と改革を聞きながら、僕は日本に来てから曾てなかった興奮に時を忘れ、最終電車で池袋に帰った。これが僕らの初対面だった。翌日、僕らは一日中神田古書店をのぞいて廻って、次の朝、君は米国へもどって行った。

若し「霊犀一点通」の言葉がぴったりするならば、僕らの手紙のやりとりが正にそうだと確信する。見知らぬ君から手紙を貰ったのは一九七四年三月の中旬だった。君は「台湾の文化沙漠」を切切と訴え、すべてのインテリゲンチャが「披荊斬棘」すべきで、大文章でなくても、雑文でも、文学の通信でもいいから書きつづけるようにと僕にハッパかけた。今思うに、君の赤子の心に答えなかったのを僕は悔みて余りあるのだ。

君は『僵斃的現代詩』『詩的没落——香港台湾新詩的歴史批判』の一連の文章で、詩壇にダイナマイトを投げつけた。『実事求是，不作調人』、厳しい態度で書いた数々の論文は、当然のことながら、多くの身に覚えのないレッテルと憎悪を買った。君は「開剿」され、満身創痍になった。しかし豪放磊落な態度は相変らずだった。君の冷徹な論理に貫かれた文章の中には消えぬ情熱の炎が燃えさかっていた。戦場に赴く兵士のように、安定したカリフォルニア大学教授の職を捨てて、君は台湾に帰った。

僕は秘そかに恐れていた。が、嗚！果して鼻癌が君の生命を蝕んでしまった——獅子は遂に倒れてしまった！

友よ、君は今でも「不作調人」のために叩かれているのだろうか？

友よ、僕が捧げる鎮魂の酒を干せ。そして君の夢のオアシスに安らかに眠り給え。君の火は消えはしない！

一九八五．八．一六．東京

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

台湾政大教授唐文標氏逝去

台湾『自立晩報』の報道によれば、台湾政治大学数学系教授唐文標先生は鼻ガンを患っていたが治療の効なく六月九日病歿、享年四八歳。唐文標氏は広東開平の人、アメリカ・イリノイ州立大学大学博士。カリフォルニア大で教鞭をとり、『中国時報』報道文学審査員、雑誌『夏潮』の編集者をつとめた。著書に『唐文標砕雑』『天国はわれわれのものではない』『私は永遠に若い』等の雑文や評論集。一九七九年には中山学術賞を受賞している。

中華全国台湾同胞連誼会と中国作家協会はそれぞれ台湾政治大学に弔電を打ち、唐文標教授の御遺族に対し同氏の病歿に深い哀悼の意を表した。

（人民日報一九八五年六月三〇日、第四版。）

〔３〕陳　映真

1937年生まれ、台湾省鶯歌鎮出身。作家、評論家(許南村の名を用いる)、淡江文理学院外国文学科卒。68年８月、政治事件で投獄され、７年間創作を中断。出獄後、職を転々とかえながら旺盛な文筆活動を続け、台湾郷土文学作家の中で最も嘱望されている作家。

主要作品に、「第一件差事」「将軍族」「夜行貨車」「雲」等、評論集に『知識人的偏執』（許南村）がある。

自らを「市井の小知識分子」と規定した彼の初期作品「我的弟弟康雄」「故郷」「死者」や「祖父与傘」には、挫折、敗北、困惑、侮辱の体験をもった人物が登場する。この期の作品にあらわれる小知識分子には、社会の転換期の中での無気力、絶望、憂鬱、自己嫌悪の感情が横溢していたが、66年以降は、それらを揚棄して、より理智的で分析的で冷静な現実主義への路を歩みはじめる。

最近では、多国籍企業の活躍する台湾社会と第三世界との共通性を探求したテーマが多い。1983年アイオワ大学で開かれた国際作家交流計画に参加、大陸の茹志鵑、王安憶母娘らとも交流した。　　（葉寄民）

〔３・参考〕

台湾郷土文学作家陳映真の中篇小説『夜行貨車』がスクリーンに登場することになった。この映画の監督は、少し前大陸に帰ってきた元台湾映画監督の謝雨辰。台湾から帰ってきた作曲家で、『竜的伝人』の作者侯德健がこの映画のために作曲を担当する。謝雨辰夫人で、元台湾星城映画会社・プロデューサーの張金鳳がプロデューサーをつとめる。

『夜行貨車』は、台湾商工業界を背景とし、多国籍企業に勤務する何人かの中国人職員の異なった生活態度についての描写を通して、台湾社会の商業化、経済の国際化がもたらす病態を暴露した。

謝雨辰は、『夜行貨車』の原作著作権を留保するために、一定の原作料を陳映真に支払う、と語っている。謝雨辰夫妻、現在北京電影製片厳に勤務。映画は香港振業映画会社より配給。この作品は'86年春節に一般公開。

（人民日報1985年１月４日の記事より。）